報復都市と露天商

カトマンズ市の露店撤去政策に寄せて

北嶋 泰周 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程

Kıtajıma Taishu Email: kitajima.taishu.72s@st.kyoto-u.ac.jp

1970年代以降、ネパールの首都であるカトマンズは都市化による急速な人口増加が進んだとされ、現在のネパールにおける都市労働者の約半数はインフォーマルセクターに従事していると言われている(Toffin 2010)。なかでも特に目を奪われるのが、道端の至る所で営業する露天商たちであろう。市街地を5分も歩けば40~50人の露天商を目にすることができる。路上営業は主に都市貧困層のセーフティネットになっており、その一部では組合化を進めることで行政機関から営業権を獲得してきたとも報告されている(Shrestha 2006)。一言で露天商と表現しても、路上にブルーシートを敷いて販売する者、自転車や天秤を使って売り歩く者、許可を得て露店を構える者など、彼らの営業形態は様々である。

私は学部時代、カトマンズ市内に位置するアサンチョークからインドラチョークにかけて営業されている路上市を調査してきた。この地域は繁華街のタメル地区と、生き神クマリが住む旧王宮広場という二つ観光地の間に位置しており、当該路上市は生鮮食品から日用品までの全てが揃う、いわば「市民の台所」としての機能を持っている。

2022年の夏、私はコロナ禍を経て約3年ぶりに路上市を訪れた。ロックダウン期は満足に営業をすることができず、預金を切り崩し、場合によっては銀行から借金をしながら生活していたと聞いていた。しかし、現在の彼らはコロナ禍を乗り越えながら、これまでのような活気のある路上営業を再開していた。特にこの3年間のうちに、環境への配慮からエコバッグを使う人々が増え、一部の露天商は「私の店ではプラスチックバッグを使いません」というボードを掲示していた。この路上市は、90年代に野菜の端材やゴミの大量発生が問題となり、営業廃止が囁かれたこともあった。それを乗り越えてきた経験から、現在もこのような環境に配慮した取り組みを積極的に実施しているようだ。

アサンチョークでの露店撤去

2022年9月21日の午前10時、今回の調査を終えたつもりになっていた私は、一人の露 天商から食事に誘われていたため再びアサンチョークを訪れた。この日はいつも以上に人 集りができており、その中心には20人ほどのカトマンズ市警察の職員が集まっていた。間 もなくして、アンナプルナ寺院の横に設置されている一つの大きな露店群が取り壊され始 めた。「ついにアサンにも来たか」と私は言葉を漏らしてしまった。その露店では7人の露 天商が営業しており、そのうち数人は警官に証明書を見せながら営業権を主張する。しか し、ある高齢女性の露天商は何も抵抗することができず、ただ涙を流すだけであった。ア サンチョークでも特に存在感を放っていた大きな露店群は、まるで何もなかったかのよう に虚しく石台のみが残されてしまった。この露店撤去は警官たちが来てからわずか1時間 程度の出来事で、7人の露天商の仕事場が一瞬にして失われてしまった。対照的に、撤去現 場の向かいではライオンズクラブによる献血キャンプが開かれており、参加者とスタッフ は献血証明書を片手に写真撮影をし、露店が壊されている様を動画に収めていた。なかに は拍手しながら歓声を上げる者もいた。私はこの不気味なほどに和気藹々とした光景を目 撃し、形容しがたい恐怖心を覚えてしまった。



これらの露店撤去や露天商の摘発を推進しているのは、2022年5月からカトマンズ新市長に就任したばかりのバレン氏である。彼はラッパーとしても有名であり、先の選挙では無所属からの当選であった。彼は露天商や違法建造物、違法駐輪によって歩道で渋滞が起きていることを問題視していた。そして、撤去の現場指揮を執っているのは、同じくカトマンズ市警察署長に就任したばかりのパンデー署長である。バレン市長の側近として彼のマニフェストを実行するパンデー署長は、市長と並んで市民にとって新進気鋭の改革者として認識されている。ライオンズクラブの献血スタッフたちはこぞってパンデー署長に写真撮影を求め、まるで芸能人であるかのような扱いを受けていた。以前から彼と親交があった私は、この日も指揮官としてアサンチョークに来ていた彼に話を聞こうとしたが、写真撮影を求められ続ける彼と話せるような状況ではなかった。ようやく話かけることが

できた私は「明日の朝8時に私のオフィスに来なさい、コーヒーでも飲みながら話そうか」 との誘いを受けた。

翌朝、私は彼のオフィスで露店の撤去に関して話を聞いた。彼の見解をまとめると、①公共空間において時間や場所に関係なく路上営業は違法である、②翌月から取り締まりを強化する予定である、③行政として露天商たちを救済するつもりはない、④彼らはアウトサイダー(都市流入民)であるため地元に帰って働けば良い、という4つである。8月末に別の地域で摘発を受けた露天商の一部がカトマンズ市役所前で抗議活動を行なった際、市当局は代替案を練るということで一旦落ち着いていた。1週間ほど前、パンデー署長の部下も「3~4か月後には露天商のために新しいマーケットを建設される予定だ。だから2度目の抗議活動は起きていない」と話していた。しかし、彼に改めてパンデー署長の見解を伝えた上で問うてみると「あの話は予定であって確定ではないんだ。まだ何とも言えないな」と言葉を濁すだけであった。

「私はどこに帰れというのだ」

私は昨日撤去されたばかりの露店へ戻り、摘発を受けた露天商のP氏から話を聞いた。 主にスナック菓子や日用品を取り扱うP氏は、ネパール政府に出店料を納めている「正規の」露天商であり、彼だけでも40年以上も同じ場所で営業を続けている。また、彼を含め今回の摘発を受けた7人の露天商が営業する売り場は、世襲的に受け継いできた場所である。私がパンデー署長から聞いたことをP氏に話すと、彼は呆れながら以下のように語る。

「私の家族は200年ほど前からこの場所で営業してきた。私だけで40年以上は経っているし、私の父も祖父も同じ場所で営業していた。私はカトマンズで生まれ育ち、今もずっとカトマンズで生活している。あのパンデーが「地方の故郷に帰れ」と言ったんだろ? 私はどこに帰れというのだ。地方に私の帰る場所なんてないよ。だって、ここが私の故郷なんだから」

別の露天商は、昨日の撤去時に警官に対して「露店の前でポーズを取る若き日の父」の写真を見せながら抗議していた。また、アサンチョークはカトマンズ市27地区役所から管理委託を受けている非営利団体のアサン・セワ・サミティ(以下、サミティと省略)が管理しており、撤去時も前会長のY氏を中心に管理権の主張と撤去強行の撤回を訴えた。しかし、警官たちは「ここは公共の場所だ」の一点張りで露店撤去を強行した。もはや議論の余地なしという具合であった。また、サミティはアサンチョークに1時間あたり20ネパールルピー(日本でおよそ20円)で利用できる駐輪場を独自に設けており、パンデー署長はこれも撤去対象になることを告げた(猶予は48時間だけ与えられた)。サミティは3人の駐輪場スタッフを抱えていたため、彼の宣告は新たにこの3人の職が失われることを意味していた。翌々日の朝、駐輪場の撤去が進む様を眺めていたスタッフの一人が身につけていたのは、いつもの「セキュリティー」と書かれた蛍光色のベストではなく、至って普通な茶色のセーターであった。彼がもう駐輪場を警備する必要がないことを物語っているようであった。Y氏はこの撤去に対して以下のように語る。



「この前 (2022年9月6日) の撤去では4人、今回の撤去では7人の露天商が売り場を失ってしまった。今回の7人のうち2人は自分の家を持っておらず借家で暮らしている。彼らは仕事がないから金も稼げない。稼げないから家も出ないといけなくなる。私たちが彼らを助ける方法を探さないといけない」

Y氏は、何度も警官に撤去強行の撤回を訴えたが、パンデー署長の威圧感に押されてしまい、最後は苦笑いを浮かべながらあたりをウロウロするだけになってしまった。事務所に戻ったY氏に対して私は「カトマンズ市警察は好きか? 嫌いか?」と少し意地悪な質問をした。彼は未だ苦笑いを浮かべたまま返事をしなかったが、そのすぐ後に「世界中のどこであれ、民衆の多くが警察を「好きだ」と答えることは難しいんじゃないのか?」と静かに語った。

瓦解した空間に萌える新たな芽

それ以降、これまで頻繁に巡回していたカトマンズ市警察の姿をアサンチョークで目撃することは少なくなった。彼らはカトマンズ市全体の「違法とされる」露店を一つずつ撤去していく必要があるため、アサンチョークだけにかまっていられないのだろう。カトマンズ市警察によって「綺麗」にされたアサンチョークは、露店が建っていた石台とその周りで呆然と座り込む元露天商たちを残して、新たな日常を形成しようとしていた。彼らは「今は何もできない、ただ待つだけだ」と語りながらも、いずれは抗議運動に踏み切ろうと露天商の仲間と共に計画を立てていた。彼らもただ泣き言を吐いて終わるわけではない。自分の生命が懸かっているのだ。

また、残された石台に腰掛けて野菜を売る露天商がちらほらと見られるようになってき た。もちろん、彼らは撤去された露天商とは異なる人びとである。彼らはカルパンと呼ば れる天秤型の道具を使って野菜を運びながら販売する。現在のアサンチョークは、露店と いう建物やその仕切りによって形成されていたはずの空間秩序は瓦解し、ある種の混沌と した「公共(=特定の誰かのものではない)|空間となっている。しかし、逆説的に言えば、無 秩序/混沌とした空間は、誰にでも使われることを可能にする「豊かな非決定性(ド・セル トー 1987) | を秘めているとも取れる。もちろん、そこはP氏をはじめとする7人の「正規 の」露天商たちの場所であり、彼らの抗議運動の実施次第では売り場を取り戻すことがで きるだろう。 その場合、 再び秩序ある空間に再編されると思われる。 しかし、この新しい露 天商たちは石台という場所に執着しているわけでもない。彼らは元々アサンチョークの 端で販売していた者たちであり、今は一時的に便利な石台で営業しているに過ぎない。そ のため、たまに巡回してくる警官を目撃すると、(最も目立ってしまう) 石台から離れて広場 の端で営業を再開する。その背景には、彼らは売り場を「ここが自分の場所だ」と固定的に 考えているのではなく、文脈ごとに空間を再認識し、その時に応じて最適な空間を使って いることが関係している。もし7人の露天商が戻ってきたとしても「あの場所が使えなく なった」以外の意味は存在せず、元の場所や別の場所へ移動するだけである。

カトマンズは報復都市と化すのか? ― かりそめの考察として

今回のアサンチョークで発生した露店撤去が意味していたものは、私の想像以上に大きかった。9月上旬までは、露天商の中でもバレン市長に対する意見は割れていた。とある露天商の親子を見ても、娘は支持しているが父親は一貫して「あの男は嫌いだ」と苦い顔をしていた。彼らは管理団体に出店料を支払う「正規の」露天商であり、娘は「自分たちは摘発されないだろう」と考えていた。一方で父親は「明日は我が身」かのように日々不安を募らせていた。事実、パンデー署長は管理団体を含めて「違法なことをしている」と切り捨てており、200年以上も政府の「公認」であったはずの露店が撤去されている。この徹底ぶりに娘も「やっぱり私も嫌いだ」と意見を変えるようになっていった。

もちろん、私の周りにもバレン市長を支持する者は多い。衣服店を構える店主は、出店料を納めずに公共の道路を占拠する露天商を否定的に捉えている。また、長年の政治不信も影響しているようだ。多くの支持者が口にするのは「これまで政府は機能していなかった。バレン市長はちゃんと実行してくれる」というものであった。確かに、彼は無所属から当選し、政党の論理に絡め取られることなく政策を遂行できる能力は持っている。しかし、露天商の摘発においては、市民による「公共空間/みんなの場所」という聞き心地のよい道徳的言説のもと、アウトサイダーとも侮蔑される都市貧困層に対する報復主義的な性格が窺える*1。確かに、露天商によって通行人が渋滞を起こす現場はよく目撃され、私自身も人混みに揉まれながら煩わしさを感じていたことは否定しない。ただ一方で、ストリートフードが支柱をなすカトマンズの食文化において、露天商はその基盤を為す存在であることも押さえておく必要があるのではないか。カトマンズ市民の食生活は露天商によって

支えられているといっても過言ではない。

最後に、これからも摘発を受け続けていく露天商を、我々はどのように理解していけば 良いのかについて考えたい。そこで、文化人類学者の関根康正による、社会的包摂/排除 論を批判的に検討した議論を紹介して締め括りたい。 関根は、社会的に周辺化されてきた 人々を捉えるにあたり、上からの「包摂/排除」論が想定する包摂的救済を待つだけの存 在としてではなく、支配的ディスコースの縁辺を縫うように、他者を取り込みながら自前 の世界を構築していくブリコルールの「主体性」として活写する必要性を指摘する(関根 2018; 関根ほか 2017)。本稿でいえば、撤去に屈しない姿勢を見せるP氏たち、あるいは特 定の土地に執着しないモビリティを用いて、カトマンズ市警察の摘発を悠々と回避する露 天商の姿を捉えることだといえよう。また、その根底には、この分裂社会において社会的 包摂/排除論は窮状現象への善処という良心的な政策立案に貢献する一方、真の原因であ る支配中心的な構造の隠蔽作用に加担しかねないという、関根自身の問題意識が存在する (関根 2017)。つまり、露店を撤去された11人や今後も増えていく元露天商たちのエンパ ワーメントだけでは、「公共空間だから」、「通行の邪魔だから」という言葉には表象されな い、報復主義に基づいた「市民」による排他的行為までは捉えることができないというこ とである。したがって、今の我々に求められているのは、露天商という他者を違法行為と 結びつけた「排除のまなざし」や、貧困問題と結びつけた「包摂のまなざし」で解釈するの ではなく、彼ら自身の視点から世界を捉える人類学的な理解だと思われる。パンデー署長 がP氏たちをアウトサイダーだと誤解しているように、我々はカトマンズの露天商に対す る理解が乏しい。また、これからのカトマンズという都市を理解する上で、露天商の存在 は無視できないものとなってきている。そのなか、これからも露天商に対する摘発行為は 続き、やがてカトマンズは完全な報復都市と化すかもしれないと危惧される。このように、 路上空間が均質化していくカトマンズにおける「市民」や露天商の動向については、引き 続き注目していく必要があると思われる。

注

*1 スミスは報復主義の特徴を、ミドルクラスや特権階級集団による市民の道徳や家族の価値、近隣の安全といったポピュリズム的言説に隠れた、都市の「盗っ人」とみなされた人々に対する抑圧やリベラリズムに対する感情的反動だと言及する。この背景には、1980 年代のアメリカにおける、ジェントリフィケーションが先導した都市のミドルクラスにまつわる楽観主義が終焉を迎え、同時に都市の強力なアクターとして女性や性的マイノリティ、労働者階級、失業者、移民などが台頭してきたことが挙げられる。その結果、1990 年代からゲイやホームレスに対する路上暴力、アファーマティブ・アクションや多文化主義を敵視するパブリック・キャンペーンというかたちで報復都市と呼びうるものが出現した(Smith 1996: 94; スミス 2014: 352)。

参考文献 • 引用文献

- スミス、ニール (2014) 『ジェントリフィケーションと報復都市――新たなる都市のフロンティア』原口剛訳、ミネルヴァ書房。
- 関根康正 (2017)「「社会的排除/包摂」論批判――ネオリベラリズムの終焉にむけて」関根康正・鈴木 晋介編『南アジア系社会の周辺化された人々――下からの創発的生活実践』叢書「排除と包摂」 を超える社会理論 3、明石書店、197-218 頁。
- 関根康正 (2018)「ストリート人類学という挑戦」関根康正編『ストリート人類学――方法と理論の実践的展開』 風響社、15-29 頁。
- 関根康正・鈴木晋介 (2017)「社会的排除の闇を内在的に読み替える」関根康正・鈴木晋介編『南アジア系社会の周辺化された人々――下からの創発的生活実践』叢書「排除と包摂」を超える社会理論 3、明石書店、9-18 頁。
- ド・セルトー、ミシェル (1987) 『日常的実践のポイエティーク』 山田登世子訳、国文社。
- Shrestha, Sudha (2006) The New Urban Economy: Governance and Street Livelihoods in the Kathmandu Valley, Nepal. Alison Brown (eds.), *Contested Place: Street Trading, Public Space, and Livelihoods in Developing Cities*. ITDG publishing, pp.153-172.
- Smith, Neil (1996) After Tompkins Square Park: Degentrification and the Revanchist City. Anthony D. King (eds.), *Re-Presenting the City: Ethnicity, Capital and Culture in the 21st-Century Metropolis*. New York University Press, pp.93-107.
- Toffin, Gérard (2010) Urban Fringes: Squatter and Slum Settlements in the Kathmandu Valley (Nepal). *CNAS Journal* 37(2):151-168.

■著者紹介

- ①氏名(ふりがな): 北嶋泰周(きたじま・たいしゅう)
- ②所属:京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程
- ③生年と出身地: 1998年、長崎県生まれ。
- ④専門分野・地域:文化人類学、南アジア地域研究、ネパール。
- ⑤ 学歴: 徳島大学総合科学部 (地域創生コース) を経て、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (グローバル地域研究専攻) に在学中。
- ⑥**現地滞在経験**:主にネパール・カトマンズ。コロナ禍は大阪市西成区 (あいりん地区) で調査していました。
- ⑦研究手法: 質的調査 (参与観察・インタビュー等)。ガタイの良さを高く買われて大量の野菜運びを任されることが多く、それが調査の第一歩になります。
- ⑧所属学会: 日本文化人類学会、日本南アジア学会
- ⑨研究上の画期:2018年に参加したネパールでの農村調査。本来の関心はアフリカ地域研究であったが、カリキュラムの都合で海外調査演習の選択肢がネパールしかなかった(引率はアフリカ地域研究者)。アフリカ渡航に向けた練習のつもりで参加したが、農村でお世話になった方々に「また来年に帰ってくるよ!」と伝えたこともあり、そのままネパールで調査を続けることになった。
- ⑩推薦図書: オジェ、マルク (2017) 『非-場所──スーパーモダニティの人類学に向けて』中川真知子訳、水声社。